

今年度より、初期臨床研修の選択科に緩和ケア内科が追加されました。

研修を終えた2名の研修医の先生より感想をいただきました。

～ 傍島千尋先生 ～

緩和ケアは自分らしくできるだけ穏やかな最期を迎えるためになくてはならない概念です。でも、日本では始まったばかりの新しい分野になります。医療的なサポートだけでなく、患者様のキャラクターや人生観などを、踏まえて患者様と一緒に最期の迎え方を考えていく姿勢が求められます。患者様のあらゆる苦痛の緩和をするために幅広い医学知識も要求され、奥が深い分野です。二ヶ月間の研修で患者様から多くの学びを得ました。研修生活では疾患に目が行きがちですが、視野を広げるのに最適な研修ができるのが緩和ケアであると感じました。

～ 田村奈保子先生 ～

私は研修医2年目の後半で緩和ケアを回りました。そこでまず戸惑いを覚えたのは、いわゆる今まで経験してきた『治療』ではなく、患者さんの『苦痛』に焦点を置いてのアプローチというものでした。緩和ケアのイメージとして強かったのは疼痛への対処でしたが、実際はそれだけには留まらず、呼吸困難、悪心、便秘、食事形態や精神などと多岐にわたり、治療のみを考えていた臨床と比べて考えるべき範囲はとて広く、実に様々な視点が必要でした。治療を念頭に考えてきた今までの視点より、緩和ケアは患者さんに近いようにも思えました。短い間でしたが、研修を終えてみて、この科を回ったのが研修医としての終盤の時期で良かったと感じています。主治医として治療に向き合っていた頃の、治療的観点からの視点がおぼろげながらも自分の中に根付いた上でこそ、そこから先の、一歩患者さん側に入った緩和ケアの視点の重要性が解るように思うのです。一度立ち止まり、患者さんの『苦痛』にフォーカスを当てて考える時間は医者として必要でしょう。ですが、日々の臨床に追われる中で、しかも研修医には、それはとても難しいように感じます。けれどとても大切なことです。研修の後半に、医師としての考え方を増やす時間として、緩和ケアの研修をお勧めします。